



親子はねやすめの報告

NPO 法人 親子はねやすめ代表理事
東京神田 RC 宮地 浩太様

卓話にお招きいただきありがとうございました。前回、卓話にお邪魔したのは、2019年の年末で、約18か月ぶりに皆様にお目にかかれることとなりました。これまでの期間、新型コロナウイルス感染防止のため、日ごろご支援いただいております親子はねやすめの活動は、オンラインを使用したミニコンサートや茶話会で多くのご家族とのコミュニケーションをとってまいりました。また、余命少ないお子さんのいるご家族や医療的ケアの必要なご家族のお母様が余命宣告を受け、その生活のサポートを微力ながら努めて参りました。

コロナ禍での活動は、私どもにとって様々な気づきを得ました。外出しにくいご家族の孤立疲弊を如何に防ぐのかという観点に立てば、オンラインを使用するアプローチは有効であること。また、オンラインの企画に参加くださいましたご家族のお住まいは東京をはじめ、栃木、新潟、宮城、神奈川、千葉と複数の県に及んでおり、地域を超えたご家族間のコミュニティーにつながられる可能性を強く感じさせていただきました。また、団体としての存在意義等を考える時間も持てました。ご紹介いたしました私たち親子はねやすめのビジョンは、東京お茶の水ロータリークラブの皆さんがサポートくださいました学生のリーダーと、団体事務局が言葉にいたしました。お時間ございます時にいま一度目を通してくださいますと幸いです。そして、昨年秋には東京都より「認定」の称号を受けることができました。ご寄付いただいた方々、法人様に税額控除を受けていただける団体に成長しましたこと、ここにご報告申し上げる次第です。設立当時、認定の取得など考えにも及ばず7年を走り続けましたが、さらに多くのご家族の笑顔を生み出すためには活動資金がどうしても必要で取得に向け準備を2年ほど前から進めてきました。ようやく社会的に見ても社会の歯車としてのスタート地点に立てたように感じております。今まであまり積極的には行ってまいりませんでした。賛助会員と法人様のサポーターを募集し始めました。ぜひ、ご家族の笑顔のためにご検討いただけたら幸いです。

さて、私個人の親子はねやすめが世のために少しでも果たすことができたらという希望を御茶ノ水ロータリークラブで初めて卓話をさせて頂いた以来、ここに改めてお伝えいたしたく存じます。「障がいのある方（その家族を含む）と社会の壁を下げること。」卓話最後に少し触れましたが、現在この日本で障がい者手帳を持った方々は国民の7%を超え8%に届きそうな人数です。ご高齢の方が多くいらっしゃいますが、これから若い世代が増え続けていくと察しています。私ども親子はねやすめの対象児は、ようやく障がい者として扱われるようになりました。（年々多くの命が救

われている中で、どうしても医療機器なしでは生きていけないお子さんたちが増え続けています。）現在の社会は、障がいのある方々に対して海外に比較しまだまだ後進国と感じています。何か壁のようなものが立ちだかっている、作っているように思えてなりません。よって、健常者が、障がいのある方々への理解が進みにくい環境下で経済を回していると見ています。先々、社会全体が今の形のままでいると、増々すでに起きている事件や事故が増え続けるのではないかと案じています。そして、障がいを持つ方の数は増えていく中で、社会で働く方々の10人に1人は何らかの障がいを持つ社会がもうすぐにやってきます。「何ら問題はない」そんな社会であってほしいと願っています。そうなるためには、現在社会で働いている方々の障がい者に対する理解が欠かせません。例を取ると、社内の摩擦は個々人の性格、考え方で起きうるかと思いません。が、そうではない要素（発達障害など）が含まれている場合もあるのではないかと感じています。この先10年から15年の間に、この時代を築上げた先輩方が天寿を全うしていきます。その人数は40,000,000人とされており、人口も1億2千5百万人から8千万人時代になります。たった10年から15年の間に社会が激変していきます。何が重要なのか、数ある課題をどう解決するのか。若い世代に何を残せるのかがいま問われていると強く感じています。障がいのある方々への理解は、同時にその家族への理解に通じ、社会の歪みを和らげると信じています。

私たちが活動してきた中でのエピソード、その一つをご紹介します。ご支援を頂いている法人様がいくつかあります。その一企業様にお勤めのご家族から団体に連絡が入りました。「主人が務めている会社が行っている親子はねやすめへの支援を知りました。私たち家族は、イベントに参加できないのでしょうか。」この問いに、よく連絡をしてくださった！と感謝に似た心の高まりを感じました。当たり前となっている個人、家族のプライバシーは、守られるのが当たり前の中で「知られたくない」という当人の想いに、誰しもが納得をしている時代。組織において、知らないのも当たり前。しかし、一方で「無関心」という言葉が私の中で浮き上がります。さらに「話しても無駄」という当人の初めから諦めてしまう社会環境があると感じています。何でも話し合える社会的風土があれば、大切な社員の持てるポテンシャルをもっと引き出せる可能性が日本において多く残っていると感じています。この状況を一步進めるためには、「おせっかい」という言葉が当てはまるのかもしれませんが。

「おせっかい」は、嫌われる。これはこれからの時代に一律ではないと思っております。声にできない、声を出せない心の叫、私たちの耳には飛び込んできません。ロータリーソングにあるように「やあ！」と声

をかけること、会員同士を超えて声を掛け合うことができたなら聞こえてこない声も聞こえてくるかと考えています。もちろん、困っている様子の方に声掛けをして「ありがとう」の声が返ってこないことも多いでしょう。「余計なことしないで!」「そこをどいて」私自身そんな声が返ってきたこと度々です。そんな答え、声を聴くと、こう感じます。社会がそう答えるようにさせてしまっていると。

劇的に孤立疲弊する家族や社員を減らすことができるのではないか「やあ!」という声かけ。誰しも実践できる I serve そのものなのではないでしょうか。

長くなりました。先だつての卓話でお話をしたかった内容を簡単に改めて綴りました。私も人前でお話をするにあたり未熟であることを改めて認識しました。

奥山会員のご冥福を心よりお祈り申し上げます。